

<櫻田會通信>

台湾便り①:『『世界一の親日国』を訪れて——危機に対処するために私たちがすべきこと』

大東文化大学法学部
政治学科教授
武田 知己

さて、2023年4月から12月まで滞在したポーランドの首都ワルシャワを離れ、在外研究の拠点を台湾の首都台北に移してから、あっという間に2か月がたった。あと2週間で帰国しなければならないとは、時の経つのは実に早いと思わずにはいられない。この間、台湾で感じたこと、考えたこと、学んだことは、少なくない。その一端を2回にまとめ、在外研究第2弾として読者の参考に供したい。

「世界一の親日国」

筆者は、2014年の初訪台から、今回で台湾は5度目である。しかし、これまでは時間の限られた調査旅行や国際会議登壇という用事のみで、実は故宮博物館にすら行った事がなかった。ユーラシアとヨーロッパの狭間に位置し、対ロシア戦争の最前線で戦うウクライナを支援する前線基地となったポーランドから、北東アジアと東南アジアの境目に位置し、対中国問題で一



(写真は、台北ドーム 2024年3月3日筆者撮影)

気に存在感を高めた台湾へと拠点を移した理由については続編で述べるとして、今回、中央研究院近代史研究所に所属しながら2か月半を過ごしてみて強く感じたことは、台湾はこれほどまでに「親日」的だったのかということだった。アニメ、音楽、翻訳本、和食、スナック…どこを見ても、日本のモノは、台湾の生活の身近に溢れている。ポーランドと台湾は親日的という点で共通しているが（ポーランドの親日振りについては「ポーランド便り①」参照）、台湾の親日度は、ポーランドをはるかに越え、恐らく、世界で1位、2位を争うのではないかと感じる。誰もが日本人だとわかると親しげに一言二言、時には日本語で話しかけてくれる。金門島の案内のお姉さんは、大学で日本語を学び、久しぶりに日本人観光客を見たといっ

で大歓迎で島から見える風景を説明してくれた。日本人は特別待遇よ、とまで言ってくれた。

また、ついこの間の3月2日、3日に台北にやって来た読売ジャイアンツの親善試合は私の住む信義区にある美しく巨大な台北ドーム(臺北大巨蛋)を満員にした。日本でも大きく報道されたと聞いているが、筆者は楽天モンキーズ(楽天桃猿)との試合を観戦した(勿論楽天を応援させて貰った)。試合途中では、台湾で大人気の美しい楽天のチアガールたちが、その直前に発表された大谷翔平の結婚をネタにしていたのも話題であった。みんな日本に強い関心を持ってきていて、日本が嫌いだという人には本当に1度も会っていない。

街中にあふれる日本語の量には、時々非現実的だとすら感じるほどである。同じ漢字文化があるという理由はそれほど重要ではない(ご存じの通り、隣国中国ではそれはない)。台湾では、街中の看板やチラシ、商品に1,2文字日本語を使うというのではなく、日本人が、しゃべれなくても意味が分からなくても英語をつかうあの感覚で、日本語を使ってくれているのである。また、筆者が所属している中央研究院近代史研究所近くの食堂(小吃店)は、名前を「歐一喜」というが、中国語(すなわち台湾でいう国語)での発音は、「オウイーシイ」。つまり、ここは「おいしい」という名前の中華食堂なのである。日本語で「デリシャス」という名の蕎麦屋があるというような感じである。外国語を用いる際のこうしたセンスを含めて、2023年年末ぎりぎりに台湾にきて、既に日本に帰ってきた気になってしまったのはこうした環境のせいである。

もう1つ、日本を身近に感じるのは台湾の街の風景のせいでもある。台湾には日本統治時代の建物が沢山残されている。街並みにも少し日本のテイストがある気がする。また、近年何度も沖縄に視察に行っている筆者は、台湾にはとっとする程沖縄とそっくりな風習や文化があることに、驚きと共に大変な親しみを感じている。

(写真は、金門島にある沖縄にあるのとそっくりな亀甲墓
2024年2月22日筆者撮影)

ただ、この2か月半の間に各地を旅行して、特に日本統治時代の建物は、筆者が子供のころ、バブル前の古き良き日本の面影かもしれないと思うようになった。アメリカ東海岸に古いイギリスが残ったように、台湾のあちこちにぼつりぼつりと古い日本が残ったのである。もっとも、1987年に始まる民主



化以前は、日本統治時代の遺物は様々に破壊されているので、それらが残されたことは幸運だった。特に台湾では時々鳥居を見ることがあって(再建されたものすらあるという)、やはりはっとさせられる。そういったものを大切にしてくれている台湾には感謝の外ない。

しかし、民主化後の街の開発発展こそ、日本人に台湾に「日本」を思い起こさせる最大の理由であろう。市政府や台北101付近の開発された町並みは渋谷や新宿にそっくりだが(交差点に立つと余計にそう思う)、それだけではない。アジア太平洋に広がる日本統治・占領時代の遺

跡をルポルタージュした西牟田靖は、コンビニやファストフード店の姿が「初めてなのに慣れた風景」という台湾の印象の理由であると2005年の本で書いているが、筆者も同じ意見だ。特にヨーロッパから来ると、韓国に次いで世界で2番目の密度で存在するというコンビニ店と牛丼屋が、ここは日本ではないかという錯覚を起こさせるに十分なのである。

こうした環境だけで台湾は日本人にとって居心地がよくない筈はないが、とりわけ居心地を良くしてくれる理由は、台湾で感じる日本への圧倒的な愛情だ。今回、台湾にきた直後に発生した能登半島地震(2024年1月1日)こそ、筆者に忘れられない印象を残してくれたものである。台湾ではすぐさま募金活動が始まり、19日までに、13万4368筆、5億4158万9468元、2024年2月現在の日本円に換算して、約25億5800万円もの巨額の浄財が集まった。同じ地震国である台湾は、福島県生まれの筆者にそもそも近い存在であり、震災遺構も尋ねたが、この経験は、台湾が日本にとって本当に大事な国(中国からすれば「地域」なのだが)なのだと思うにはいられなかった。(写真は台中にある1999年の大地震「九二一地震」の跡地 2024年2月10日筆者撮影)



台湾は何故これ程「親日」的なのか——「台湾アイデンティティ」との関連から

しかしながら、である。学者のイヤな所かもしれないが、2ヶ月もいると、いやまてよ、と考えるようになる。台湾は一体何故ここまで親日的なのだろうかと考えるようになったのである。

日本文化が、アニメや漫画、和食に代表されるように、極めて伝播力が高く、人気が高いことは間違いない。台湾は日本に近いので、余計にそうした伝染力の影響を受けるのであろう。しかし、それ以外にも、理由はいくつか考えられる。

消去法で行きたい。まず、植民地統治時代の日本が台湾に頗る良いことをしたという理由が考えられる。しかし、筆者はそれを信じることはできない。台湾史、経済史の泰斗である中央研究院の林滿紅氏は、筆者に「政治や文化の面で植民地時代の日台関係を見たら嫌なことばかりです」と語る。確かにそうだろう。民主化以前の国民党政権時代の政治刑務所を利用した国家人権博物館(新北市)を見学した際、同行してくれた若き日本史の研究者とともに話したのは、「統治時代の日本の政治刑務所の方がはるかに厳しかったですよ」ということだった。

また、日本を拠点に台湾独立運動を戦った史明(2019年没)の住居を利用した史明文物館(新北市)を訪問した際には(史明氏は東京池袋で食堂「新珍味」を営んでいたことで有名であ

る)、台湾の台北第一中時代の史明の写真を見学中に、理事長の黄敏紅館長からこう尋ねられた。「なぜ写真の史明先生は黒い服を着ていて、ほかの日本人の生徒は白い制服を着ているのでしょうか？私にはわかりませんが」。勿論わかって聞いているのである。それは日本人と当時の台湾籍民とを明確に区別する為である。経済的搾取、民族蔑視(優等意識)、差別待遇は、日本の台湾統治でも当たり前に見られたのである

しかし、日本統治時代が悪いことばかりだったとも信じない。台湾史研究の先駆者であり、ベストセラー『台湾の歴史』(2007年初版)を書かれた周婉窈氏は、次のように言う。「台湾の近代化は、清が台湾を統治していた最後の十年間にも進んでいました。ただ、大規模な近代化は確かに日本時代に進められました。インフラストラクチャなどの建設に関して言えば、日本統治の貢献は大きかった」のだと(対談「台湾から見る」『論座』2007年9月号での発言)。有名な例は八田與一であろう。彼が心血を注いで完成させた桃園大圳、嘉南大圳や烏山頭ダムは、台湾の衛生状態を劇的に改善させ、水利を促し、農村を潤した。前述の林氏も、政治・文化面ではいやな事ばかり、と言った言葉に続けてこう言った。「しかし、経済面でいえば日本統治は台湾の成長の基礎でした」。これは台湾が日本統治時代を評価する論理の一つであろう。



また、周氏は、前掲書で、日本が豊富で実用的な知識を多数台湾にもたらしたこと、強烈な郷土愛などの道徳教育面でかなりの成果を出したことを強調している。

そして、こうした論理が、民主化以前の中国国民党支配(以下、国民党)への強い反発とあいまって、親日的感性を社会に定着させていった。台湾人から知的な発話能力を奪ったと表現される「二二八事件」以降、その反動として日本統治時代が相対的に美化されていったのである。外省人が、日本統治下の台湾人を奴隷化教育を受けたものと考えたことがあまりにも安易だったのである。この軋轢が、若林正丈氏がいうように、中国や中国人と我々は違うといういわゆる台湾アイデン

(写真は2024年2月28日、二二八記念館を視察する馬英九氏。筆者撮影) ティティの原点となり、やがて現在も政権をとる民主進歩党(以下、民進党)を生んだ一つの背景となったのである。

この台湾アイデンティティという問題は、この短い滞在中に、幾度となく考えさせられた問題であった。それは、次回述べるように、筆者の研究テーマとも密接に関連している。結論的に言えば、親日的感性と台湾アイデンティティは、日本統治時代、特に皇民化運動時代のそれと、複雑な関係を形成している。前述の周氏は言う。「ただ、インフラ面などでの貢献とは別に、日本統治には別の観点があります。教育で台湾の歴史を教えないこと、日本語で教えること、教育を通して台湾人の文化、伝統、言葉を剥奪するような側面もあったこと」と(前掲「台湾から見る」)。台湾アイデンティティと親日的感性は繰り返すように、政権党となるまでに成長した民進

党のアイデンティティの一つでもある、日本統治時代のありのままの記憶とは整合的ではない。それは、国民党への対抗原理がなければ定着はしなかったろうと思われるのである。

2024 年台湾総統選挙・立法院選挙をめぐって

以上のような歴史的背景を考えると、この1月13日にあった台湾総統選挙・立法院選挙をめぐる日本の一方的な熱狂ぶりには、少し違和感を持たざるを得なかったというのが正直なところである。

この選挙を見に、多くの日本人が訪台していたことはインターネットや SNS などから明らかだった。2 か月前に文字通りネットにあふれていたそういった報告・発信を見ると、大方は民進党を応援していたように思われる。国民党支持者は批判の対象とされることが多かったように思われる。

選挙結果は、従来からの大方の予想通り、台湾総統選挙においては、与党・民進党の頼清徳氏・蕭美琴氏のペアが 558 万 6,109 票(得票率 40.05%)を獲得して当選した。両氏は 5 月 20 日にそれぞれ総統・副総統に就任することになっている。筆者も台北市で行われた民進党の演説会を聞きに行ったが、特に蕭氏の演説は声に張りもあり、輝きがあって、強く印象に残った。彼女が人気も評価も共に高かったのも頷ける。

しかし、最大野党の国民党の候補者、侯友宜氏・趙少康氏のペアも、467 万 1,021 票(得票率 33.49%)を獲得した。第 3 党として若者からの支持が高いとされた台湾民衆党(以下、民衆党)の候補者、柯文哲氏・吳欣盈氏のペアも、369 万 466 票(得票率 26.46%)と健闘している。

他方、同日の立法委員選挙はどうであったか。定数 113 議席のうち、第 1 党となったには、実は国民党であった(52 議席)。民進党は 51 議席で僅差ながら単独過半数を獲得できなかったのである。そして民衆党が 8 議席を獲得した(その他無党籍が 2 議席)。民進党の国会対策を担当する柯建銘・立法院党団総召集人(国会対策委員長に相当)は柯文哲や民衆党への不信を表しているから、1996 年に初の直接選挙が行われて以降、民進党は初めて 3 期目を担うことになったものの、立法府の力が強い台湾の半大統領制では、難しい政権運営を迫られることは確実となったのである。そして、2 月 1 日に行われた立法院長・副院長選では、国民党の韓国瑜・江啓臣が 54 票で民進党の游錫堃・蔡其昌の 51 票を破り当選した。つまり、第三勢力は、予想通り、国民党の議長・副議長を支持したのである。行政と立法のねじれ、三党間の駆け引きがどのような政局を生むかは誰にもわからなくなっている。筆者は、この選挙中に三党の演説会をすべて傍聴したが、参加した中では、国民党の集会に一番強い印象を受けた。領袖の演説にしっかり耳を傾けおとなしい民進党とは異なって、支援団体が多数集まり、追いつけるものの強さで、熱狂的な一体感を持って盛り上がっていたからである。戦前の大陸に起源をもつ政党で、支持者の年齢層は確かに高い。だが、噂よりも若い世代の参加者がいた。また、今

回は若い代議士たちが立候補したが(二世が多いという)、彼らは実に弁が立ち、輝いていた。



民衆党は、台湾民主化運動の近年の目覚ましい事件の一つと言える「ひまわり学生運動」※の経験者などからも支持を得ていたといわれる。確かに、街頭での応援団には活動家特有の雰囲気をもっている人が、民進党並みに多かった。選挙後、縁あって、元「ひまわり」たちに話を聞く機会を設けることができた。既に30代に入りかけている彼らの共通項は、明らかに国民党を嫌って

(写真は2024年1月12日新北市での国民党集会。筆者撮影) いることである。特に許せないのは、馬英九が人民解放軍と行った合同演習であったという。

しかし、取材時には実はこんなことも言っている。「台湾にはもう日本の影が多すぎる。日本文化は十分だ」「中国共産党は許せない。しかし私たちはリベラルだし、マルクス主義が嫌いかと言えば嫌いではない。格差是正は私たちの願いだ。社会主義は良いことだ」「私たちの文化には中国は欠かせない。台湾には多層的で多様な文化がある。漢民族の文化はその一つだ」。しかし、彼らは異口同音に「人民解放軍が攻めてきたら日本は助けてよね、お願いだから」というのである。お酒の勢いもあろうが、筆者には、これが台湾アイデンティティを最も強く有する集団(ちなみに彼ら4人は皆漢民族であった)の偽りのない本音だと思われる。

※「ひまわり学生運動」とは、2014年3月17日、立法院で、中台間の市場開放を目指す「サービス貿易協定」の批准に向けた審議を、当時の野党・民進党に占拠された国民党政府が一方向的に審議を打ち切ったため、翌18日午後6時ごろから学生が立法院議場内に進入した事件である。午後9時になると300名を超えたという。民衆によって議場が占拠されたのは台湾の憲政史上初めてであって、立法院の外には学生たちを支持する市民が数万人ほど集まったという。また、抗議活動には民進党も学生と歩調を合わせた。ちなみに、この原稿はその10周年の記念日に書いた。

また、ある知識人が選挙前に筆者にこういったことも忘れられない。「今度の選挙では民進党が大統領選挙で勝つでしょうね。しかし、立法院選挙では国民党が勝つでしょう。で、そのくらいがちょうど良いんです」。この発言には、中国という巨大な経済大国・軍事大国・文化大国を隣人に持ち、その強力な圧力を感じている台湾の政治的叡智が込められている。台湾はこの中途半端な状態を耐え抜かねばならないというのが彼の意見である。ちなみに彼も強烈な台湾人アイデンティティの持ち主であり、大変な親日家である。この中国との距離の取り方は、民進党とは異なっているが、どこか元「ひまわり」たちと、違う角度からではあるが、共通性を

有しているといえるように思われる。

すなわち、筆者がいう日本の熱狂ぶりへの「違和感」とは、あまりにも一方に肩入れし、他方を嫌いすぎている傾向への違和感ということである。率直に言えば、あまりに民進党を応援しすぎ、国民党を嫌い過ぎていないかということである。

国民党は、昭和の歴史を学んでいる立場から言って、戦前の日本が徹底的に追い詰め、戦い、そして敗れた相手であり、戦後のいわゆる「親台派」の日本の政治家が、中国との距離を睨みながら付き合ってきた相手である。そのつながりを切ってしまうことは、日本外交にとって、また北東アジアの国際関係にとって、有害でしかない。

逆に、台湾独立運動の担い手の多くは共産主義に共鳴しており(前述の史明もその一人である)、中国への見方も単純ではないことに気が付くべきだ。日本に多数生まれている民進党支持者の政治的立場がどのようなものかはこの際議論しないとしても、現在の日本政治は、味方をも正しく見られていないのではないか。特に、台湾アイデンティティを持つ彼らと付き合いには、日本自らがまず歴史と正面から向き合っているのかを問わねばならない。そして、彼らのアイデンティティをどれだけ尊重しているかを問わねばならないのである。それなしには、かえって 21 世紀の日本の最大の友好国を却って失望させてしまうのではないか。つまり、日本は「保守」ではなく「リベラル」でなければ、実は台湾における民進党の支持者と価値観を共有することはできないように思うのである。

※同様のことは、本年 11 月に控えているアメリカ大統領選挙にも言えることではないだろうか。トランプや共和党を支持する日本の「親米派」は、日本人に寛容なのは多様性を主張する民主党支持者にむしろ多いことをどう考えるだろうか。トランプは決して「親日」ではない。なお、民進党は南部に強い支持基盤があるが、台湾南部の昔からの支持者は、実はこうした民進党のリベラルな傾向に批判的なものも少なくないといわれているが、筆者もそのような言動をいくつか見聞している。

「台湾有事は日本有事」論について

さて、近年の日台関係の緊密さを語る言葉を一つ挙げろと言われた「台湾有事は日本有事」という言葉を抜かずわけにはいかない。しかし、この言葉も又、一歩立ち止まって検討すべきであるように思われる。本稿の最後に、以下、考察してみたい。

まず、悲劇のうちに亡くなられた故安倍晋三元総理が語って、台湾人を歓喜させたこの考えの暗黙の前提を取り上げてみたい。それは、「台湾有事」の後に「日本有事」が来るという順序であることは間違いなからう。少なくとも、現在、そのような順序を意識して用いられることが、日本では普通のようなようだ。

その意味で、日本は、台湾をロシアに対する「ウクライナ」の立場に置き、日本を「ポーランド」の立場に置いていると言える。それは、最近の両国関係の中でいくつか確認できることである。2022 年 7 月 28 日に、自民党の石破茂、浜田靖一・両元防衛相らが台湾のシンクタンクの幹

部らと意見交換した際、台湾側は「ウクライナ(侵略)ではポーランドが支援の窓口になっている。台湾有事で日本はどんな役割が果たせるのか?」と問い質している。これが、管見の限り、以上の発想が表に現れた最初と思われるが(2023年2月17日付産経新聞)、翌2023年4月14日には、超党派議員連盟「日華議員懇談会」の木原稔・事務局長がロイターとのインタビューで、仮に台湾有事が起きれば日本はウクライナ戦争で避難民を保護したポーランドの役割が求められるとの見方を示した。現在の当局は、この考えでほぼ固まったといっようである。

では、彼らは、人民解放軍は同時に尖閣を攻めには来ないという想定なのだろうか。沖縄本島はともかくその他の離島、例えば空港がある宮古や石垣は、台湾有事発生後、すぐにでも占拠されないだろうか。軍事の常識から言えば、これら台湾海域周辺の離島への敵上陸は、十二分に考えられることである。こうしたことと同時に思い出して欲しいのは、ポーランドはロシアに(少なくとも2024年3月段階では)攻められていないことである。台湾有事で想定される事態は、ウクライナ戦争で想定されるウクライナとポーランドとの関係とは異なるのではないか。「台湾有事は日本有事」という概念は「順序」を意味するのではなく、お互いに攻められるという危機共有の表現と見なければ、日本人の判断を誤らせるように思われる。筆者は、「台湾有事は日本有事」とはその通りだと考えるものであるが、それは以上のような「同時並行的有事の発生」を想定しているからである。

こうしたことを前提に、次に、筆者の印象に強く残る、中国青年救国団(台湾における社団法人で前身は中国青年反共救国団)の葛永光氏による、次のような言葉を取り上げたい。2022年5月5日に自民党の青年局一行を台北に迎えた彼は、「安倍晋三元首相は『台湾に何かが起こるといことは、日本にも何かが起こるといことだ』といいましたが(略)、私たちは『台湾に何も起こらなければ、日本にも何も起こらない』(原文は「台湾無事、日本無事」と願っています。平和を維持し戦争を回避することの重要性を認識しており、両国は平和を共同で追求し、自由と民主主義の価値を守るための協力を強化すべきであると思います)(2022年5月5日付『台北報導』。筆者仮訳・下線部筆者)。なお、葛氏は、2023年2月14日に台湾青年代表団代表として自民党を表敬したときにも、同じ言葉を繰り返している(2023年2月14日付『産経新聞』)。

ウクライナ戦争の現状を見れば、一旦戦争が起きれば、巨大な軍事大国と小国との闘いの優劣は即座に明らかにあることが痛感できる。しかも、他国からの支援は永遠には続かないことを目の当たりにしている私たちは、「台湾無事、日本無事」という言葉に込められている深慮遠謀を、もう一度検討してみる必要はないだろうか。そして、それでも一旦緩急あれば戦うということはどういうことか、そのためには何をすべきなのかを考えてよいはずである。彼らが国民党系であることとどちらがより優れた「現実感覚」をもっているかは別問題で、全く無関係であることも言い添えたい。

「危機」はどこにあるのか

以上述べてきたことから、読者に誤解されたくないのは、筆者は民進党を支持すべきではないとは全く思っていないことである。また、有事の際の戦闘への準備はどうしても必要であると考え、通常兵器による抑止力の整備も絶対に必要であると思っている。また「台湾は大丈夫だ」などとも筆者は思っていない。むしろ、台湾の中堅以下の若い世代の強い危機感の強烈さを目の当たりにし、台湾の人々の意識が大陸から立ち込めるとんよりとした灰色の雲で常に覆われていることを知ってから、その危機感は各段に強まった。前述の大きくなったひまわりの子供たちと話していた際、その1人にこう尋ねられたことがある。「あと、50年後、100年後の台湾はどうなっていると思いますか？僕はもう台湾はなくなっていると思っていますよ」。それは中国の一部になっているという意味に他ならない。筆者はこう言った。「それはワーストケースシナリオだよ。でもそうなったら、日本ともう一度一緒になるのはどうだ」。彼は寿司を頬張りながら笑って言った。「いやー、そう来るとは思わなかったですよ(I didn't see it coming)」。しかし、その眼は全く笑っていなかったし、見渡しても、誰一人、愛想笑すらしていなかったのである。



こうした反応は、本年2月末という時期的な問題もあったかもしれない。筆者はたまたま本年2月の金門島をめぐる一連の事件の直後に金門島を訪れた。

前から予定していたのだが、2月14日、金門島海域に中国の「漁船」と称する者が侵入し、台湾の海上警察である海巡署の警備艇の取り締まりに会い、それから逃げようとして転覆し、「漁民」2人が死亡した事件が発生した。

(写真は、金門島に残る台湾海峡危機の残骸。2024年2月22日、筆者撮影)

中国のSNSは一時、2人は「漁民」ではなく「愛国青年」だったと暴露してしまったが、瞬時に削除されたという。この文章を書く直前の3月14日朝にも同じような衝突が起こり、また中国の「漁民」2人が溺死している。「漁民」なのに泳げないのだろうか。どう見ても不自然である(楊海英「なぜ台湾・金門島周辺で中国「漁民」の転覆事故が続くのか？2024年03月16日付日本版ニューズウィーク)。日本人の誰もが2010年9月の尖閣諸島での「漁船」を思い出さずにはいられない。元ひまわりたちも金門島の衝突は何かの前触れであり憂慮すべきだと考えていたし、尖閣をめぐる日中の紛争もよく知って居て、日本に同情的であった。

しかし、ここでも日本の主要な論調に棹さすことをお許しいただきたい。こうしたことから、金門島は危ない、嘗て国境両軍が戦火を交えたこの地は、再び開戦前夜にあるというイメージが今の日本人にはあるかもしれないが、4日間滞在し、スクーターで隅々を回った筆者の眼が

ら見た金門島は、至極平和であった。勿論、戦争は平和な海の向こうから突如としてやってくるものだ。だが、島民からの以下のような証言も、記憶しておいて損はないだろう。「自分は昔アモイと上海で働いていた。彼らは共産主義だから、私たちとは(料理人として修業していたという大卒の彼は、日本人である筆者に向かい、確かに「私たち」と言ったことが大変印象的であった)精神構造が違う。それはそうだ。しかし、金門から見える中国経済は凄い。金門が欲しいのは水であり、食べ物であり、交易であり、お金だ。アモイとの間に橋をかけるのは賛成だ(現在、アモイと鬼門を大橋で結ぶ構想があり、住民投票が計画されている。おそらく賛成が反対を上回るだろうと予想されている)」。そして、筆者が、でも中国は戦争を仕掛けて来るんじゃないか、といったら、即座にこういう答えが返ってきた。「台湾政府が中国とけんかしなければ戦争なんて起きないよ」。

これが、金門島に住む最前線の台湾人の一つの生活感覚である。「安全保障の国境」と「経済や文化の国境」は、彼の意識の中で明確に異なっている。金門島の住人の全てがそうではないだろうが、住民投票で大橋建設に賛成多数が予想されるということは、やがて、台湾は対中国の最前線の金門でやや厄介な問題を抱える可能性は高い。

「危機」を「管理」ということ

この感覚が、膨張志向を辞めない隣国との間で緊張が高まるこの瞬間において、ナイーブな考えであるとは言えよう。また、台湾は、そして、台湾を含むアジアの西側諸国は、そうした隣国と断固戦うという態度を示す以外に、どういう選択肢があるのか、具体的な答えが筆者にあるわけではない。ただ、一つ言えることは、戦争という選択肢は絶対に選ぶべきではないということである。それは筆者が平和主義者だからではない。小国が大国と戦争した際の悲惨さが、ウクライナの戦いを見れば明らかだからに他ならない。小国は他国からの支援がなければ戦えず、その支援は長くは続かない。そして支援がなくとも、小国の国民は命がけで戦わねばならない。日本人は、すぐに、この戦争と「大東亜戦争」とのある種の類似に気が付く。ウクライナ東部での戦争は、いわば現代の沖縄戦である。それを台湾で、また日本の領土で再現させてはならない。そして、そのために必要なのは、これ以上危機を悪化させないという決意と体力であるといえよう。つまり、「危機」を認めつつも最悪の事態を回避すべくあらゆる手段を用いて現状維持を図ることである。やがて、時が味方し、事態が好転する事を待とう。私たちには、そのための勇気と体力がきっとある。自分たちの底力を信じよう。こうした信念に支えられた「危機管理」こそが、台湾と日本が目指すべき方向であるというのが、筆者が現状で言える精いっぱい結論である。(続く)

参考文献:

家永真幸『台湾のアイデンティティ:「中国」との相克の戦後史』(文春新書、2023年)
呉叡人(梅森直之・山本和行訳)『フォルモサ・イデオロギー: 台湾ナショナリズムの勃興 1895-1945』(みすず書房、2023年)

周婉窈(濱島敦俊監訳)『図説台湾の歴史(増補版)』(平凡社、2013年)

西牟田靖『僕が見た「大日本帝国」』(角川ソフィア文庫、2005年)

春山明哲「日本における台湾史研究の100年：伊能嘉矩から日本台湾学会まで」『アジア経済』60号、2019年

若林正丈『台湾の政治：中華民国台湾化の戦後史(増補新装版)』(東京大学出版会、2021年)